



大阪商業大学 FD ニュースレター

第10号

2012年9月発行

(FDとは…Faculty Development の略。教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。)

■目次■

- P. 1 平成 24 年度公開授業および意見交換会開催される
- P. 2 公開授業を終えて
 - ①総合経営学部公共経営学科 教授 西岡尚也
 - ②総合経営学部商学科 講師 宮城博文
 - ③総合経営学部商学科 講師 吹原顕子
- P. 5 公開授業意見交換会
 - 教務課 松谷美樹
- P. 7 学会・フォーラム参加報告
 - 経済学部経済学科 講師 橋本信子



2012.7.3.「異文化コミュニケーション」(杉田先生)

■平成 24 年度公開授業および意見交換会開催される■

平成 24 年度本学 FD 活動の 1 つとして、公開授業が下記の日程で開催された。

授業科目・担当教員・教室については以下のとおりである。公開授業の選択については、今年度新任の教員ならびに年齢・性別・科目（語学や情報等も含めて）・教室の大小等に偏りのないように調整して選出した。

月 日	時限	科 目 名	担当教員名	教室
7 月 2 日(月)	3 限	法学特講 A	永井 久晴	424
7 月 3 日(火)	3 限	異文化コミュニケーション	杉田 陽出	643
	4 限	オフィスコンピュータ I	松島 みどり	情 3
7 月 5 日(木)	2 限	開発経済学	柴田 孝	427
	3 限	商学概論 I	宮城 博文	425
7 月 6 日(金)	1 限	英語 II A	吹原 顕子	442
	2 限	スポーツ実習	樋口 泰	体育館
	5 限	社会・地歴科教育法 I	西岡 尚也	441

なお各授業において、FD 委員会より受講学生にアンケート（授業の進め方についてどのように思ったか、またこの授業について改善したら良いと思うことは何か）を実施し、意見交換会を、7 月 11 日（水）15:00~16:00（於：本館 6 階研修室）におこなった。参加者は公開授業担当教員、参観教員および担当の教務課員。

■公開授業に育てられた私の教員人生■

総合経営学部 公共経営学科 教授 西岡尚也

振り返れば私は、かれこれ31年以上も教員をやって来たことになる(高校19年半、大学12年)。しかしながら大学入学当時、私は教師になるつもりはなかった。というより、1970年代の「三無主義」世代であり、荒れた中学校・高校を経験していて、その現場の教員に「幻滅」していたし「軽蔑」していた。教員だけにはならないと決めていた。ところが私の大学時代の恩師は、機会あるごとに「君は小学校教員に向いている」といわれた。その暗示もあり、私は教師という職業を選択したのである。

「公開授業」「研究授業」に関しては、これまでも数多くを実施・参観してきた。特に駆け出しの高校教員時代には、先輩方の授業を覗かせてもらい、多くの「手法」「技術」を学ばせてもらった。実は学んだというより「盗んだ」という方が正確である。

また高校では、毎年6月には教育実習生を受け入れるので、実習生にも私の授業を「公開」することが年中行事であった。実習生に観られるという緊張感が、より良い授業にチャレンジするモチベーションにもなった。このことが教員としての「プロ意識」の高揚と「やる気」にも役だった。いずれにせよ「自分の授業をみせる」ことは「他人の授業を観る」と同様に、教員相互の資質を向上させる効果が非常に大きい。

大学教員になって、教育学部(前任校)が職場になると、附属小学校や中学校での研究授業にも積極的に参加した。そこで学んだことは、高校・大学と比較にならないくらい、小学校における授業の方が、教員の技術・手法・教材研究などいずれをとっても「奥が深い」ということである。

ここでいう「深い」の意味は、教材研究・指導案・事後指導どれをとっても、研究授業後の研修会では、「掘り下げた」議論がなされていた。いうまでもなく、広汎な教科分野を網羅する小学校教員には、それだけ幅広い教養・素養が不可欠なのである。

逆に高校・大学では、教科内容は「専門性」が高まるので教員の守備範囲も「専門分野」に限定されてくる。また受講生も履修登録という自らの意志で選択してきた「講義(科目)」であるという前提がある。したがって「少しは」学ぶ側の興味・動機が学生側にもあることになる。

それと比較して、小学校・中学校では、「必修科目」であり、興味の如何に関わらず全員が受講することになる。ゆえに関心

のない児童にも「理解しやすい」「おもしろい」授業が要求されるのである。いかに子供たちを惹きつけるか、そのための公開授業や研究授業が盛んで、より「深い」研修が必要になってくる。ただし、ここまでの話は以前(20~30年昔)の高校・大学である。現在高校はほぼ全員入学、大学も(一部の大学・学部を除き)希望者がほぼ全入する時代となった。同時に「ゆとり世代」と呼ばれる彼らは、教科内容・授業時間のどちらも「少ない」ことを意味する。「少ない」ことは「不十分」であるということの意味する。

実際私が今回「公開授業」を実施した、「社会・地歴科教育法I」の受講生55人のうち、高校時代地理を履修したものは6人しかいない。とりわけ地理は社会科3分野ではもっとも基本になる内容である。地理的認識=空間認識のないまま歴史や公民(政治・経済・倫理)を学んでも、土台のない場所に建物を建てるのと同じである。つまり高校3年間、「地図帳」や「地球儀」に一度も接しないで高校を卒業し、大学入学してきたのである。数学でいえば四則計算や分数を学ばずに、教員免許を目指すのと同様である。

これは社会科の例であるが、他分野でも状況は同じである。こんな実情に対応する形で、昨今の「FD」という視点が出てきたと私は考えている。いいかえれば、大学教員にも小学校・中学校と同様に謙虚な姿勢で「公開授業」「研究授業」そして「教員研修」が不可欠な状況となっている。しかしながら、このような社会情勢に敏感に反応して「FD」に積極的にに関わり、自らの講義を改善しようと取り組む大学教員はまだまだ少ない。

結論的には、教員によっていろんな授業形態や手法があっても良いと思う。しかしながら受講生の興味・関心を惹きつける「楽しい講義」の方がはるかに良いのである。その際「公開授業」や「研究授業」は必ず役に立つ、ぜひ一人でも多くの方に「FD」に参加してもらいたいと考えている。今回このような機会を与えていただいたことに感謝し、今後も「楽しい講義」「良い授業」をめざし努力を重ねていきたいと思う。



2012.7.6.「社会・地歴科教育法I」(西岡先生)

■公開授業実施後の感想と課題■

総合経営学部 商学科 講師 宮城博文

今回、私が担当する「商学概論Ⅰ」が公開授業の対象科目となり、第12回目に当たる7月5日木曜日の3限目に実施することになった。本講義の履修者は90名と中規模の講義であり、当日は通常の講義同様78名の学生が出席した。講義の内容については、第12回目と前期の講義終了が近づいているということもあり、学生には多少難しいテーマではと考えたが、通常の流れ通り、「流通チャネルの再編成(メーカーから小売店へのパワーシフト)」というテーマを扱った。

今回の公開授業では、私が講義をする際にポイントとしている3点をFD委員や事務職員、そして講義終了後の学生に対するアンケートを通じて確認できるよいチャンスとなった。はじめに講義をする際にポイントとしている点として『「商学概論Ⅰ(流通論)」という科目への好意的な態度の形成』が挙げられる。「商学概論Ⅰ」という科目でとくに「流通論」を中心に講義を進めているが、当科目は商学を専攻する学生にとって知っておくべき基幹科目である。しかし、当科目は、1回生配当の科目であり、つい最近まで「高校生」であった彼ら彼女らにとってはなじみの薄い分野であることは否めない。その中で、私の講義への目標の1つとして、「商学(流通論)との接点が少なかった学生に対してどれだけ興味を持ってもらうか」ということに力点を置いており、興味を持ってもらうために、学生にできるだけなじみのある、もしくは興味がありそうなテーマ(例:自動車、コンビニ、スマートフォン他)を選択しながら講義を進めた。

講義を行う際の2つ目のポイントとして「重要な個所のメモ取りの習慣化」が挙げられる。本講義を進めるにあたり、後述するPower Pointを利用して、講義の冒頭で、「前回の復習」、そして講義の終了前に「おわりに」という形で講義の全体のまとめを説明して講義を終了しているが、その個所についてはあえて資料は配布していない。その理由としては、「Power Pointの資料として配布していない部分に関しては重要なことを先生が説明している」、もしくは「資料は配布されているが、その前後関係を理解して、先生が配布する資料にプラスアルファ、自分なりのコメントを加え、自分のノートにする」という意図を込めているからである。

最後に、3つ目のポイントとして、「講義を円滑に進めるうえでのPower Pointの利用」が挙げられる。Power Pointを

利用する理由として、「講義内のバランスの確保」が挙げられる。プレゼンのソフトを利用することにより、90分の講義の中で、「どの部分に力点を置くのか」、もしくは「どの部分はさらっと進むのか」という講義の進行に有益であると考えているからである。さらに、前述の1つ目のポイントと関連しているが、「流通」という学問分野をなかなか自分の経験や興味とリンクさせることができない学生に対して、映像や画像を見せることで、学生自身に身近な存在であるということを連想させるうえで、プレゼンソフトは優れていると考え、利用している。

以上3点を心掛けて、公開授業を進めたが、ある程度、その目標を達成している部分とそうではない部分が今回の公開授業を通じて明らかになった。まずはじめに、『「商学概論Ⅰ(流通論)」という科目への好意的な態度の形成』に関してであるが、学生からのアンケートの中で、「事例がわかりやすい」「画像等があり、イメージしやすい」という肯定的なコメントを頂くことができた。講義の内容に関しても、学生がよく利用し、イメージしやすい「小売業」についての説明を導入として用いるように心掛けている。しかし、1回生の学生にとってなじみは薄い、流通を語るうえで欠かすことのできない「卸売業」「メーカー」についてまだまだ説明不足であると今回の公開授業で痛感した。今後、学生に理解してもらう方法を考える必要があると今回の講義で感じた。

次に、「重要な個所のメモ取りの習慣化」に関してであるが、Power Pointの資料として配布していない個所を学生にメモを取ってもらう、もしくは資料だけでは講義の流れがわからないようになっているので、その流れを自主的にメモを取ってもらうというスタイルのため、私の講義ではほとんど板書をするということがないのが現状である。しかし、学生からのコメントの中で、「もっと板書してほしい」「ポイントをまとめて、黒板に書いてほしい」という意見を頂いた。さらにFD委員会の中でも、Power Pointではなく、板書を中心に講義をするというコメントが多くでていた。これらのコメントを参考にしつつ板書をもう少し行っていくことと同時に、学生自身に自分で必要な個所をメモする習慣を身に付けさせるような方法を考える必要があると感じた。

最後に、「講義を円滑に進めるうえでのPower Pointの利用」であるが、Power Pointの利用により、「講義を一定のペースで行うことができる」、もしくは「画像・映像を容易に使うことができる」という利点があり、実際学生からのコメントの中で、「Power Pointの進め方がいい」というコメントを頂いた。しかし、一方で、Power Pointを利用することにより、私自身がよくばってあれもこれも説明しようとするので「進行が速くなる」と

いう指摘を頂いた。また、本講義の大きな課題として「3時間目の昼食後の講義の中で居眠り者をどれだけださないか」が挙げられるが、Power Pointの利用により「睡魔を引き起こす」という課題も今回の公開授業で浮き彫りになった。この点に関しては、他の先生方も同じような課題を抱えているとFD委員会で指摘があったが、居眠り防止のためには「板書」をうまく活用しながら、できるだけ緊張感のある講義運営を行う方策を立てる必要があると感じた。

以上、私が常に心掛けているポイント、並びにそれらの達成度と講義進行の課題について上述した。今回の公開授業の中で達成されている部分と同時に課題を参考にしつつ、今後の講義運営に生かしていければと考えている。

※今回の公開授業を通じてFD委員会を運営している教職員の皆様から様々なご意見を頂いた。記して感謝したい。



2012.7.5.「商学概論I」(宮城先生)

■公開授業を終えて■

総合経営学部 商学科 講師 吹原顕子

7月6日(金)1限目に担当科目である英語IIA、基礎クラスの公開授業を行った。自ら英語を学ぶ方法を身につけてほしい、英語の授業の中で成功体験を積んで自信を持ってほしい、そう願って授業をしている。トップダウンで学生とやりとりしながら英文を読み、学生同士が話すことをめざしながら、その前段階として学生が自信をもってできるようにボトムアップで一歩一歩進もうと考えるようになっていた。そして、何に向かったのボトムアップなのか、それ自身が授業の目的になってしまっている、ということに気づいたのが公開授業の直前だった。

授業の最初に、この時間の最後にできるようになることを示す。そのために必要となることを練習する。そういう形へと授業を変えていこうと考えた。しかし、今回の授業は、今までの流れと教科書とのつながりが授業の中にうまく位置づかず、独立した3つの活動になってしまった。

最初は、「自己紹介に『のりつつこみ』しよう」と称してペアで漫才をする活動を行った。これまでに勉強してきたことがなんらかの意味をもつことを示したかったからだ。また、2人であれば英語を話すことへのプレッシャーが小さいこと、2人のやりとりであることが今後会話へとつながっていくこと、そして英語が苦手なことも笑い飛ばしてしまおうという気持ちがあった。

ペアの相手が発するIが主語の英文を聞き、それを聞く側の立場からyouを主語にして繰り返す。その意味を理解した上で、反応を返す。それだけの活動だが、練習で私の“I am pretty.”に対して、“You are pretty. Eh?”と返す学生の声にそれを楽しんでいることが感じられた。私たちの間で話された英語に初めて意味が与えられたように思う。

モデルの英文をもとにオリジナルの台本をつくる際に個々の学生の取り組みに時間差ができてしまったのは、活動の具体的なイメージが学生の間で十分に共有されていなかったからだろう。モデルから台本づくりに移行する段階で、全体の中での個の指導を増やしたり、学生の意見を取り入れてモデルを変えてみたりするなど、もっと小さなステップが必要だった。

学生は、「医者で手術が得意ではない」ということが言いたくて辞書で調べていた。言いたいことがあって、英語でどう表現すればよいかと話し合ったり、教員に尋ねたりすることが見られた。また、実際の実演では、発言するタイミングを考え、演技をしていた。これは漫才という枠組みが学生にとって馴染みがあり、その枠組みの中で行動することが英語を言うことや気持ちを

こめたりすることに対する抵抗を小さくしたと考える。

2番目の活動は、主語と一般動詞、助動詞 do、does の関係を声に出して言う練習を行った。何度も英語を口に出して言わせたい。たどたどしく言っている間は自分のものにならないので、滑らかに言えるようにしたい。単語のアクセントと同時に文におけるストレスやイントネーションを意識して読むために、リズムに合わせて読む練習をしている。

最後に、練習したことも使いながら、教科書の本文を自分たちで読むことに挑戦した。学生は自分たちで文の意味をとり、発音記号を参考にして音読をできるように練習する。それができるようになったかを私が確認して、先の2つの活動と同様に点数化して成績に入れている。

公開授業までの2か月余り、1対1で学生の声を聞き、様子を見てきた。そこで課題を発見し、次の授業で補おうとした。一度練習しただけでは一週間で消えてしまうのでまた練習するということを繰り返したために、今回の公開授業アンケートでは、学生から「小テストはやりがいがある」、「皆がわかるまでやってくれる」という声がある一方で「学びが少ない」という声があった。教卓のところで個人指導になってしまうことが多く、「時間がかかる」という声もあった。授業を参観して下さった先生方からも全員の学びが保障できていないとのご指摘をいただいた。

一人ひとりの学生が意欲をもって取り組み、「学んだ」と感じられる、そして力がつく授業となるように研鑽を積んでいきたい。公開授業という機会をいただき、ご意見をいただいたことをたいへんありがたく思っている。心からお礼申し上げます。



2012.7.6.「英語ⅡA」(吹原先生)

■公開授業意見交換会■

教務課 松谷美樹

2012年7月11日(水)第3回FD委員会(公開授業意見交換会)が開かれた。参加者は公開授業担当教員、FD委員、公開授業参観教員の計15名である。先生方からは以下のような意見が出た。

【公開授業および学生への授業アンケートの感想】

- ・授業アンケートに「講義の進行が早い」という意見があった。説明の仕方やパワーポイントの進め方について工夫が必要であると感じた。
- ・受講者は20名弱で、ワード技法を講義しているが、指示の出し方が難しい。学生アンケートには「説明が速すぎてついていけない」という意見もあるが、手をかけすぎる指導が良いのか疑問を感じる。
- ・授業アンケートに「パワーポイントを使った授業の説明が前後するので分かりづらい」という意見があった。大切な部分については、前に戻って再度説明したいという考えだったが、進行時の説明が不十分であったと思う。
- ・学生から「履修者が少ない」という不満意見がでている。スポーツ実習は半期1単位の科目の為、履修者が少ない。半期2単位で週2日実施することを提案したい。
- ・学生からの意見に「早口で、理解しづらい」という意見があったので気をつけたい。



2012.7.11 公開授業意見交換会

【 普段の授業で工夫している点 】

- ・通年授業において、実験的に前期はパワーポイント、後期は板書の授業を行っている。学生からはどちらにおいても「進行が速い」と意見がでており、模索中である。
- ・できるだけ学生を講義に参加させるように、賛成する意見に挙手をさせ、その理由を説明させたり、携帯電話で指示した項目について調べさせる、などしている。
- ・スポーツ実習において、技術の高い学生には、指導能力を養う為に、ほかの学生をフォローしながら練習を行うような役割をもたせている。



今回の意見交換会では、習熟度に差がある場合の授業の進め方や、学生を集中させる参加型授業のあり方など、科目は違っても共通する課題がでた。これらの課題について、先生方がそれぞれ試行錯誤しながら授業を進めている事がわかったが、1時間という非常に短い時間だった為、具体的な取り組みについて話しあえなかった事が残念だった。次年度はもう少し長く時間をとり、より深く議論しあえる場にできればと思う。



「社会・地歴科教育法」
(西岡先生)



「スポーツ実習」(樋口先生)



■学会・フォーラム参加報告■

～ライティング指導のコツ、

学生との直接対話の大切さを学ぶ～

経済学部 経済学科 講師 橋本信子

筆者は2003年、京都の私立大学法学部で初めて初年次教育科目を受け持った。同科目は専任・非常勤講師7名が担当し、アメリカ仕込みの大学教育法を実践されている先生が全体をコーディネートされた。開講前の2回の会議、毎週のランチタイムミーティング、メールリストでのやりとりを交わしつつチーム一丸で取り組んだ半年であった。最上の「新人研修」を受けたと感謝している。その後、他の大学でも初年次教育科目を担当する機会に恵まれ、関係学会等に参加するようになった。

2011年4月に大阪商業大学に初年次教育科目担当の専任講師として着任してからは、大学の仕事としてさまざまな研修に参加する機会を得た。本稿では、この1年間に参加したものの中から特に印象に残ったことを報告したい。参加した研修等は右のとおりである。

第8回
関西地区FD連絡協議会
(FD連携企画WG)
主催ワークショップ

2011.12.17
【土曜日】
13:00～18:00
【12:30 受付開始】

場所
立命館大学
衣笠キャンパス
以学館

会場
以学館

大学へのアクセスマップ
http://www.ritsumei.jp/accessmap/accessmap_kinugasa.html

会費
・関西地区FD連絡協議会会員校所属の方：無料
・非会員校所属の方：1,000円

定員 先着45名

問い合わせ
関西地区FD連絡協議会事務局
(京都大学学務部教務企画課教育企画室内)
TEL: 075-753-2395 FAX: 075-753-2485
E-mail: office@kansai-fd.org

申し込み
http://www.kansai-fd.org/activities/wg/fd_20111217.html
からお申込みください。

思考し表現する学生を育てる IV
ライティング指導の方法

「思考し表現する学生を育てる」ことが重要であることは、今日、大学教育において共通認識となり、様々な取り組みがなされています。

関西地区FD連絡協議会では、過去3回、シンポジウムやワークショップという形で、研修の機会をもってきました。4回目の開催となる今年度は、初年次教育のほか、理工系の学生への作文指導や具体的な指導モデルなども取り上げながら、「ライティング指導の方法」にしぼって、より一層実践に即した研修内容にしました。

小講演や事例紹介のほか、参加者同士で各大学・授業における事例や課題について議論するグループワークもおこないます。皆様積極的に参加をお待ちしております。

主催：関西地区FD連絡協議会

⑤2011.12.17. 関西地区FD連絡協議会 ワークショップ



2011年

①8月2日

金沢工業大学扇が丘キャンパス訪問

②8月5日

NEC 主催「就業力育成セミナー ～大学におけるキャリア教育の実践報告」(於 東京・田町 NEC 本社ビル)

③8月31日、9月1日

初年次教育学会(於 久留米大学)

④9月12日

(株)ラーニングバリュー主催「自己の探求」プログラム体験研修会

⑤12月17日

関西地区 FD 連絡協議会「思考し表現する学生を育てる IV ライティング 指導の方法」(於 立命館大学衣笠キャンパス)

⑥12月23日

龍谷大学 FD フォーラム「学びのコミュニティーをデザインする」

2012年

⑦1月28日

関西大学FDフォーラム「三者協働型アクティブ・ラーニングの展 開 最終成果報告会」

⑧3月7日

九州工業大学教育フォーラム「大学教育におけるパラダイムシフトと新機軸」 (於 アクロス福岡)

⑨3月15日

大学教育研究フォーラム(於 京都大学)

ライティング指導のコツ

上記③⑤⑨ではライティング指導についての研究発表、ワークショップに参加した。そこで得たコツを紹介したい。1)誰に向けて書くのかを意識させる。2)書くためには素材が必要である。書くことに抵抗のある学生は素材を見つけることが苦手である。そこで教員が程よく読みがよいある資料を準備する。それを学生に読み解かせ、書き出した意見を口頭で発表させてから文章化に導くとよい。3)書くプロセスを重視する。文章の「型」を用いて訓

練するのが効果的である。「型」とは文章の構成＝論理を目で見える形で意識することである。

以上のようなコツは、筆者もさっそく実践した。(大阪商業大学商経学会第287回研究発表会で報告。内容は『大阪商業大学論集』(通巻166号)に掲載予定。)

学生と直接向き合うこと

①では「ポートフォリオ」を用いたきめ細かい指導について話を伺った。ポートフォリオはあくまで道具であって、教員がそれを活用して学生と直接コミュニケーションをとることが大切だと強調されたのが印象に残った。なお同大学は正課授業外の学習支援にも力を入れている。構内には至る所に学生が自習できるコンセント付の机があり、一人またはグループで自習する学生の姿がたくさん見られた。「ライティングセンター」や「数理工教育研究センター」は、学生のニーズに合わせたマンツーマン指導をいつでも提供できる空間、人員、サポート体制を整えている。⑨での阪南大学の発表でも学生との個別面談の効果を強調されていた。生活が乱れている学生ほど細かに話を聞き出し、良いところをほめる。比較的単純なきっかけや言葉かけで授業に意欲的に取り組むこともあるという。充実した設備やシステムを整備することも大切だが、やはり教職員が学生と直に接して対話することに尽きるということであろう。



大阪商業大学 FDニューズレター 第10号

発行日：2012年9月25日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-8438

■あとがき■

FD委員会 委員長 前田啓一

ようやく、FDニューズレター第10号をお届けすることができました。ご執筆いただいた皆さん、ありがとうございました。

この「あとがき」を書いているのは、明日から後期授業が始まるという9月23日(日)の午後です。いよいよ明日から、また授業が始まるのかという気持ちになりながらも、考えてみると、学生が勉強しなくなったという声を頻繁に聞くようになっていきます。

今年3月には、中央教育審議会が、長い名前のついた「審議のまとめ」を公表しました。その概要を読むと、国民や企業が大学に対して厳しい評価をするようになったが、予測困難な時代の中かで学生は自ら課題の発見からその解決に立ち向かう力を育むべきである。したがって学生はもっと勉強しなければならない。そのために教職員は努力を惜しんではならないし、組織的な努力を継続すべきである。と、まあ、こんなような筋立てであったように思います。

ただ、そうは言いながらも、我が身を振り返ると、自分自身も学生の頃はそれほど勉強しなかったのも事実です。わずかに、興味ある分野での本を少し読んでいた程度です。つまり、日本の学生は昔も今もほとんど勉強していないことには変わりありません。むしろ、変わったのは、何も勉強してこなかった学生を、育て育むことのできない、余裕のない社会側の要因が大きいと思います。卒業後の社会が、ほとんど遊びのない、ギスギスしたものに急速に向かっていることこそが、最大の問題であるとも言えるでしょう。

とはいっても、学生がこの現実社会に立ち向かい、生き残っていくためには、われわれ教職員が力をあわせ、彼らに付加価値をつけて卒業後の社会に送り出すことが求められるのは否定できません。いやはや、たいへんな時代になりました。

■FD委員会からのお知らせ■

FD委員会では今秋、関西大学より講師の先生をお招きして下記の内容・日程でFD研修会を開催いたします。

本学の教職員の方はどなたでも参加可能です。多数のご参加をお待ちしております。

《平成24年度FD研修会テーマ》

「関西大学教育開発支援センターの活動と

三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」

講師：関西大学教育推進部教授 三浦真琴先生

日時：平成24年10月10日(水)16:30～18:00

場所：大阪商業大学 本館6階 大会議室